

集団移転 賛同と葛藤

那須烏山 対象住民

生活一変、決断に不安も

4年前の台風19号が生活、人生を一変させた。水害のリスクが高い場所から



那須烏山市下境を流れる那珂川。台風19号では左に見える左岸側で浸水被害が発生した。11日午後、同所

高台など安全な地域へ移転する那須烏山市内の防災集団移転促進事業。対象地域の住民からは「早く被災の心配をなくしたい」と、進展を願う多くの現実的な声がある。一方、住み慣れた土地から離れ家を手放すことへの葛藤や移転後の不安など、複雑な思いや迷いを抱える住民もいる。移転するか否か。先を見通せない状況の中で、住民たちは決断を迫られている。

きらきらと水面を光らせ、水田地帯から山あいへゆつたりと流れる那珂川。4年前のあの日。豪雨で川は氾濫し、住宅や農地などが飲み込んだ。「まさか床上まで水がくるとは思わなかった」。同市宮原、60代男性は当時を振り返る。避難所で一夜を過ごした。帰宅すると玄関は泥だらけ。一変したわが家には言葉が失った。何日もかけて復旧した。50代の妻は「あんな思いは一度としたいくない」と話し、移転を前向きにとらえる。

一方、築30年ほどの自宅は、巣立った子どもたちが帰ってくる場所でもある。「お父さんが一生懸命働いて建てた家。できるなら離れたくない」。妻は割り切れない思いも口にした。

できる限り早期の移転を望む人たちがいる。同市下境、団体職員男性(47)は約15年前に自宅を新築し



た。水管対策を施したが、4年前は床上浸水し、あと1秒で床上に達する状況だった。大雨が降ると心配が尽きない。「100%納得できなくてもいい。早く移転したい」と男性は訴える。同市は集団移転の事業計画のたたき台作りを急ぎ、国との調整を早期に始めた。そのためには対象区域全108戸の移転への同意が必要になる。

同市下境、農業塩野目富夫さん(75)は、90代の母親と同居している。高齢の問題が移転をためらう理由の一つだ。「いつ移転が実現するか明確に示されておらず、新しい環境に移る気力と体力があるか不安が大きい」と胸中を明かす。

台風被害を受け、川の水を田畑などへ逃す開口部を設けた堤防「霞堤」は整備計画が進み、既に一部の田

んぼは耕作できなくなつた。移転対象の区域内には所有する田畑がある。「農地はどうなるのか。移転したら、長年暮らした土地が荒れ果ててしまうのではないか」。4年が経過してもなお先が見えない現状。「台風で生活が大きく変わった」と嘆いた。

(小口華奈子、富井大啓)